



中山間地域における災害時の 初動と避難行動について考える 「一人の犠牲者も出さないために」



山梨県都留市与繩地区防災計画推進会
副会長 臼井 久

1 推進会発足の概要

都留市の指定する災害時避難場所（旧与繩営農指導センター）に集まる3つの自主防災会（上手・日向・日影）に属する約460名の住民の皆さんの、災害発生時の安全な避難や情報の共有・災害時の避難所での共助のあり方についての検討を重ね、地域から「一人の犠牲者も出さないために」平時より訓練や研修・情報提供を行っています。

自治会長と自主防災会長が兼任をする当時の状況では、毎年役員の交代が行われ、防災計画の推進は思うように進まず、その後市が進めた避難所ごとの自主防災会の結成を機に3つの自主防災会をまとめる形で防災士の有資格者4人と消防団員経験者、地元の神楽保存会の有志などが中心となり活動を進めてきました。

2 地域の背景

当地区は、標高450mほどで富士山の北東側に位置し、相模川水系の支流朝日川に沿って、地域の北側と南側に土砂災害警戒区域と特別警戒区域を抱える急峻な山地を背負い、東西に1.6km南北に0.5kmという狭隘な土地であります。

地元の神社の社史の中にも土石流の発生により一時期、社を隣の地域に移していた記述や明治40年の水害時には、私たちが拠点とするこの営農センターにあった小学校

が流されたという記述があります。近年大きな自然災害に見舞われていない中で、住民の皆さんの災害に対する緊張感が失われている状況があります。しかしながら全国各地で毎年頻発する大雨や大きな地震災害をけして他人事とせず、いざという時のために備える準備を怠らないようにと住民の皆さんの意識を喚起するよう注力してまいりました。

3 奪い合えば足りず、 分かち合えば余る

以前は、地域では行事のたびに大勢の食事の準備などを行い炊き出しなどは訓練する必要もなく、その頃は隣に誰が住んでいるかなどおのずと把握していたと思います。個人の生活が尊重される現代では、地域の住民が一堂に会することは稀なことになりました。それまでも形通り行われていた避難訓練に、大勢の人に興味を持ってもらえるような訓練をしていこうと、私たち推進会は訓練の内容を見直しました。最初はお餅つきなどイベント系のものに始まりましたが、市内に開校した健康科学大学の災害看護を学ぶ先生と学生さんの指導の下訓練をお手伝いしていただき、住民の皆さんも中身のある訓練として年々参加者も増えていきました。一昨年はコロナ禍において訓練そのものが危惧されましたが、大学の先生方のご指導の下で感染症を学ぶ訓練としてテント泊や車中泊を体験し1泊2日で開催いたしました。昨年も地域の住民



テント避難・車中泊を体験した防災キャンプ



令和元年 台風19号による土砂災害



市立病院のD-MATとの合同訓練



地域のピンポイントの情報を知らせる「Yアラート」

の皆さんと、市立病院のDMATの皆さんの協力のもと大変にリアルで本当の災害現場ではないかと思わせるような災害対応訓練を行いました。参加者の皆さんからは、こんな時自分はどう行動したらよいのか考えた、など振り返りの会の中で貴重な意見をいただくことができました。

令和元年の台風による大雨は、普段の生活道路が警戒区域にある沢からの土石流に埋まり、災害の恐ろしさを目の当たりにするものでした。狭いこの地域内で雨量を観測するようになりました。この時の3日間雨量は500ミリを超えるものでした。地域の皆さんにこのようなピンポイントの情報をお伝えしようと、LINEの公式アカウン

トを作成しYアラート（与繩地区防災情報）として活用するようになり世帯数の4分の3を超える登録となりました。

4 経験することの大切さ

TVで災害地や避難所の様子を見たり聞いたりするだけでは本当の大変さはわからないものだと訓練を通じて一つずつ経験してきました。宿泊訓練ではテント泊の皆さんから焚火の火がうるさいなど、思ってもいない指摘もありました。訓練を重ね一時避難所への移動・安否の確認・避難者名簿の作成などは繰り返すことで身につけてきたと感じています。これからも「一人の犠牲者も出さないために」尽力します。